

Title	<<了解>>の諸問題についての予備的考察：<<円卓心理学>>批判より
Sub Title	Problems of apprehension : a critique of round-table psychology
Author	横山, 浩司(Yokoyama, Kohji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.57 (1971. 3) ,p.165- 186
JaLC DOI	
Abstract	I have tried in this paper to investigate the apprehension method as a methodology of the human science, especially of psychology. And this investigation has been done through textual criticism of the concept of Ryokai in the Round-table Psychology advanced by Sato, M., Kamio, A. and Ono, T.. (1) I have pointed out the ambiguities of the concept of Ryokai in the Round-table Psychology, and then criticized. (2) Furthermore, their idea of Round-table Psychology has been criticized because of its subjectivism and operationalism. (3) Then, Ryokai as an ordinary Japanese word has been analyzed, and the human apprehension function as an aspect of the understanding functions has been examined. (4) Last, I have advocated that the Communicationology as a methodology of the humam science, and have suuggested a scheme for the basic communication process.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000057-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《了解》の諸問題についての予備的考察

——《円卓心理学》批判より——

横 山 浩 司

0.

本誌第55集に掲載された、佐藤・神尾・小野諸氏による「《円卓心理学》の提唱」は、心理学を中心とした〈心〉についての諸学史を論理的に再構成しつつ、〈アカデミー心理学〉の一般人からの乖離を懸念するというモチーフのもとに、〈了解法〉なる「新たな」、人間の〈心〉の構造を把握するための概念的枠組を得るための方法論を提唱し、記憶を巡ってそれを具体的に展開したものであった。しかしながら佐藤氏らによるこの「提唱」は私にとって、その立論のモチーフのはぎれよさとともに、幾つかの重要な点における論旨のあいまいさと承認しがたさを与えるものであった。そこで私は、自らの浅学をかえりみずにここで、氏らの論議にとってきわめて根柢的であると考えられ、かつ、私の強い関心をひく、〈了解〉・〈了解法〉の問題を中心に、氏らへの疑問と批判の提起および私自身による若干の解明をおこなおうと思う⁽¹⁾。

1.

まずはじめに、佐藤氏らが提唱している〈円卓心理学〉のおそらくその主たる方法論として考えられている〈了解法〉についての、氏らの論旨のあいまいさを具体的に指摘しておくことにする。私自身もちろん日本語の〈生え抜き〉であるし、氏らもふくめてこの論の読者も多くはそうであろうので、氏らの文の読みかたについて「全員が理解と納得にもとづく一致をみ」ることができるような指摘のしかたをもとにしておこなうことにす

《了解》の諸問題についての予備的考察

る。以下、まず、氏らの文章のなかから〈了解〉・〈了解法〉についての叙述を、〈円卓心理学〉の一般的な意味づけがおこなわれている(0.)の部分から抜粋してみることにする。

- (1) 「これ(精神分析学)は、Freud が、その天才的な洞察力をもって、神経症患者の臨床観察を基礎として、了解的方法により、心の深層を描き出し、治療面のみならず、日常場面一般にわたる人間の心理と行動のメカニズムに、いまだかつてなかったほどあざやかな光をなげかけたものである」(『《円卓心理学》の提唱」の章記号 0. 3.)
- (2) 「それ(アカデミー心理学の観点からみての難点)は、Freud の方法論たる〈了解法〉自体のもつ、非客観性の問題である。」(0. 3.)
- (3) 「……Freud という一天才の神経症患者との接触から得た洞察による〈了解法〉……」(0. 5.)
- (4) 「Freud に多くのドグマがあることは否めないであろう。しかし、これは了解法が避けることのできない欠陥なのであるか。」(0. 5.)
- (5) 「心理学における了解法は、自己観察なしでは成立し得ないであろう。」(0. 5.)
- (6) 「……行動主義およびそれを後継した新行動主義では、〈心〉が、われわれの〈常識〉にてらして、この三者(構成主義・ゲシュタルト心理学・行動主義)のなかではもっとも〈了解〉しやすい形でとらえられているように思われる。」(0. 5.)
- (7) 「……Hull の最後の体系において、仲介変数とされた〈習慣強度〉(sH_R)、〈動因〉(D)、〈誘因〉(K)などの概念は、われわれに容易に了解できよう……」(0. 5.)
- (8) 「……Tolman の体系において仲介変数として重要な〈期待〉は、われわれに直ちに了解できるがゆえに、むしろ論議をよんだので

あろう。仲介変数を導入しない Skinner の体系にあってさえ、しばしば、了解によってのみ理解できるような記述が混入して、かえってわれわれを惑わせるのである。」(0. 5.)

(9) 「この事実（上記引用 6～8）は、行動主義者たちは方法論において自己観察を否定しながら、理論構成過程の隠された部分で、自己観察に基づく了解法的方法を多分に用いていることを示しているのではないであろうか。」(0. 5.)

(10) 「…… 日常言語の分析を基礎とした、一種の了解法により、〈心〉の問題を解明しようとする〈哲学〉が存在した……」(0. 6.)

(11) 「…… Freud のドグマは、了解法自体に由来するのではなく、ひとりの了解にたよった点にあるのである。」(0. 8.)

(12) 「われわれの《円卓心理学》は、単に集団討議を意味するのではない。それは心理学の基礎をもつ複数の研究者が一堂に会し、日常言語、自己の体験、心理学が有している知見、その他〈心〉に関係するとおもわれるものすべてに関し、自由に自己観察、直観などに基づく了解法をも用いて分析を行い、それを言語により公共のものにして、全員の理解と納得にもとづく一致をみたとき、その事実は、実験的事実に比すべきものとするという手続を積み重ね、〈心〉に総合的考察をくわえることにより、現代の科学的心理学に、〈心〉の問題に直面する〈一般心理学理論〉の復活と進歩をはからんとするものである。」(0. 9.)

以上、いささか長い抜萃をしたが、こうしてまとめてみると、容易に、〈了解〉についての氏らの論議のあいまいさを読みとることができるであろう。順次それを検討してゆくことにする。

抜萃 (1), (2), (3), (4), (11) においてはだいたい氏らは、Freud の方法を指して〈了解法〉としている（(11) ではその修正の必要を述べているが）と判断されるのではあるが、氏らの提唱する《円卓心理学》の重

要なる構成部分としてこうした〈了解法〉があるらしい（抜萃（12））ので、氏らが Freud の〈了解法〉をどのようなものとして把握しているのかをもうすこし詳しくみると、そこにはかなりなあいまいさがあることが判る。（1）によれば〈了解法〉とは、Freud が「その天才的な洞察力をもって……心の深層を描き出し」た方法であり、そうした方法（語のかかりかたによっては、「心の描出」）は「臨床観察を基礎として」いるのだ、と主張されている。また（3）では、〈了解法〉は「患者との接触から得た洞察による」ものだとされている。ややあいまいにはあるが氏らの把握によれば、Freud の〈了解法〉は、臨床の現場での患者との接触のあとにあるもの、たとえば患者との接触によってもたらされたものである、とされているようである。そしてそうした〈了解法〉は、文章のとりようによっては、Freud の理論構成の方法であるかの如くに表現されている。（4）、（11）において氏は、Freud のドグマが誤まった〈了解法〉によるものである、としているが、ここでいわれるドグマが、いわゆる〈汎性説〉などの Freud の学説を意味するのならば、そう考えなくてはならない。Freud は、理論構成においては疑いもなく当時の自然科学をモデルとしていたのであり、彼の〈了解法〉は氏らの指摘とは違って、臨床場面そのもののなかにあり、患者に接する医師の、観察と治療の方法そのものであるとするのが普通であろうし、そうであるからこそ、〈了解法〉が今日においてもなお、一条の真理への光りをもつのだと私は考える⁽²⁾。つまり、（1）での「天才的な洞察力」こそがむしろ〈了解〉というタームに包摂されるべきだと思われる⁽³⁾。氏は精神分析学をアカデミー心理学とは別箇のものとして扱っているが、Freud が治療（これは実験とともに実践のカテゴリーにある）の方法論として〈了解法〉といわれる心理学（あるいは人間にかかわる科学）独自のものを用い、理論構造においては自然科学を範とした点においては、氏が指摘する「構成主義とゲシュタルト心理学」の性格（0. 5.）と同様であると思われる。（9）のように〈了解法〉と自己観察を氏らのように近しく

するのであれば、ますますそうなるであろう。)

次に氏は、(6)、(7)、(8)で、新行動主義者たちが用いる概念または記述が、しばしば「われわれに容易に了解でき」るものであると述べている。わざわざカッコをつけて「〈了解〉」としたりしているのであるから、ここで用いられている〈了解〉は、すくなくとも氏らの方法の立論の一部となるものであると思われるので、若干の吟味をしてみることは意味があるだろう。私自身、「〈習慣強度〉という概念は容易に了解できる」といわれると、何となく、そうだ、と肯定的に感じるのではあるが、ひとたび、ではその〈了解する〉ということはどういうことか、と問われたら、さらに考察を加えなくてはならなくなる。氏らが、ここでの〈了解する〉ことがどういうことであるのかの説明を省いているので、それはもっぱら読者の理解に委ねられており、それがさらに論理的な、概念知における〈了解〉の把握のあいまいさを複雑なものにしてしまっている。私の理解によれば、〈習慣強度〉、〈動因〉といった概念を〈了解する〉ことは、たとえば〈習慣強度〉というコトバを〈習慣の強さ〉、〈動因〉を〈欲求〉といった日常会話のコトバに置きかえて使用することができる(ただしこの置きかえは Hull の体系にとっても可能だ、ということではない)、そしてそうしたコトバの表示するものを自らの生活になんとかにはあるが見出すことができる(〈了解する〉というコトバのニュアンスは、はっきりと同定できることを意味していないようである)といったことであろうと思われる。氏らが(6)で、「〈常識〉にてらして……〈了解〉しやすい」といっていることは、こうした私の理解を支持するものであろう。ただ、こうした理解のもとでも、ここでの〈了解する〉というコトバは、〈理解する〉・〈判る〉というコトバと置きかえてもほとんど同義であるだろうし、結局、氏らが主張したい〈了解法〉が何であるのかはすこしも明らかにならないのである。(5)、(9)では、〈了解法〉は自己観察を必須要素とするとしているが、このことを併せて考えてみよう。すると、(6)、(7)、(8)での〈了解する〉というコト

《了解》の諸問題についての予備的考察

ばは、「自己観察」というコトバに近いものであるように考えられてくる。「自己観察」とは、自己を（観察の対象として）観察することであろうし、(6) 等での〈了解する〉ことは、前述のように、ある概念が表示するものを自己のなかに観察するといった意味をもつであろう。（自己のなかに、を強調するかぎり、〈了解する〉は〈理解する〉・〈判る〉とは違ったアスペクトをもつ。）あるものを自己のなかに観察するためには、自己を観察することを必須のプロセスとする、という変形によって (5), (9) の論理は承認される。ただしここで注意しておきたいのは、この論理では、〈了解する〉ことは〈自己観察〉を含むが、その逆、〈自己観察〉が〈了解する〉ことのすべてを尽しているわけではないことである。自己の外のものを自己の内に見ること、を〈自己観察〉は必要条件としないのである。（見ること、の認識論的な捉えかたによっては、自己の内・外の区別はつけえないであろうが。）こうしたことは、後の展開にとって意味をもってくるであろう。

(10) では、Oxford 学派が「日常言語の分析を基礎とした、一種の了解法」を用いている、または「日常言語の分析を基礎とした」哲学が、「一種の了解法により、〈心〉の問題を解明しようとした⁽⁴⁾」と読めるのであるが、この表現にはさらに「この（日常言語学派の）意味分析は、一種の自己観察といえる。……彼らはこのような内観に、さまざまな考察（その大部分はやはり一種の内観によっている——原文）を加えて、〈心〉を解釈する一つの概念的枠組を示そうとしたのである」(0. 6.) という文を加えて考えなくてはならないであろう。(10) の文では、「一種の自己観察といえる」意味分析（＝言語分析）が〈了解法〉によっている、という論理は見出せないが、これは適当に補足しておくにしても、〈自己観察〉＝〈内観〉＝〈了解法〉とするには (5), (9) の論理およびそれへの私の前述の理解とずれてしまう。Oxford 学派の方法を、Freud の〈了解法〉や常識的な意味での〈了解する〉というコトバと同時に論ずるには、すくなくとももうすこし説明が必要であろう。しかしいずれにしても、Freud と Oxford 学派

の等しい面を切りとることは、可能ではあっても無意味だと私には思われる。そこまで広義に〈了解法〉というタームを用いると、従来のすべての哲学は〈了解法〉を用いているといわなくてはならなくなるであろうし、歴史・社会科学もそうなるであろう。⁽⁵⁾ 私自身、実は後述するように、氏らとはまったく違った意味で、人間以後を対象とする科学(いわゆる人文・歴史・社会科学)の方法論の一部としての〈了解法〉を主張するものではある。

以上のように、氏らの〈了解〉または〈了解法〉は、あいまいさをもちながらも、次のごとき三つに分類される。

- ① Freud の方法としての〈了解法〉
- ② 日常言語としての〈了解する〉
- ③ 自己観察・内観とほぼ等しい、またはそれらを含む〈了解法〉

そして氏らの 0. 8. での論議では、複数者による ③における〈了解法〉が最終的に肯定されているように思われる。

2.

さて次に、抜萃 (12) での《円卓心理学》についての叙述を中心に、氏らの主張を検討してゆこう。

まず〈了解法〉についてだけ見ると、(12) ではそれは「自己観察、直観などに基づく」ものとされ、さきの自己観察にあらたに「直観」が加わり、また「など」というコトバで他の要素(?) も存在することを示しているようにもとれる。(「など」は先述の「内観」を示すのかもしれないが、日本語の「など」は必ずしも「それ以外のもの」を意味しないので、ここでは無視することにする。)「直観」というコトバが、概念知を媒介としない、という意味であるのならば、(6) などでの日常用語の〈了解〉とは斉合すると考えられるが、この点についての氏らの主張は明らかではない。そしてこの《円卓心理学》の方法についての文は、全体として、次のような二通りに読める。

《了解》の諸問題についての予備的考察

① 「了解法をも用いて分析を行」い、

② その分析の結果を「言語により公共のものに」する、そして

③ 「全員の理解と納得にもとづく一致」をめざす。

または、「了解法をも用いて」

① 分析

② 言語による公共化

③ 「全員の理解と納得にもとづく一致」と全体のプロセスに「了解法をも」がかかるように読むことができる。一「生え抜き」である私は、後者のように読む方が(③をも〈了解法〉によるとする方が)理解はしやすいのだが、文章はどちらかといえば前者のように読みやすいと思う。前者のように読むと、〈了解法〉は分析手段であり、前章での私のまとめの②のような〈了解する〉というコトバの普通のニュアンスはなくなり、従来の内観法と等しくなってしまう、要するに複数人の一致する内観を求めることになってしまう⁽⁶⁾。また後者のように読むと(②を〈了解法〉によるとすることは無視する)、③の〈了解法〉による「理解と納得」は、〈了解する〉というコトバのニュアンスは恢復するが、しかし内容的には、複数者の内観の一致とあまり変わらないことになる。いずれにしても、なぜあらたに〈了解法〉というのかは、私には理解できないのである。

このような〈了解法〉を(も)方法として提唱されている《円卓心理学》の全体について考察を加えてみよう。(12)での氏らの説明によれば、《円卓心理学》の目的は「〈心〉の問題に直面する〈一般心理学理論〉の復活と進歩をはか」ることであり、その対象は「日常言語、自己の体験、心理学が有している知見、その他〈心〉に関係するとおもわれるものすべて」であり、またその方法は、これらの研究対象に対し「自由に自己観察、直観などに基づく了解法をも用いて分析を行い、それを公共のものにして、全員の理解と納得にもとづく一致をみたとき、その事実、実験的事実に比すべきものとするという手続を積み重ね、〈心〉に総合的考察をくわえる

こと」である、とされている。またさらに、こうした《円卓心理学》の研究者は、「科学としての心理学を正式に修めた上で、異なる知識と体験とパーソナリティをもつ複数の研究者」(0.9.)であり、しかもそれが「一堂に会し」て、前記のごとき方法にのっとって研究をすすめてゆくのだそうである。以下順に、このように説明された《円卓心理学》の、目的、対象、方法、研究者のそれぞれについて検討を加えてみることにする。

氏らの《円卓心理学》の目的については、(0.1.)～(0.7.)で氏らが述べていることには異論もあるが、⁽⁷⁾トータルな人間をとらえきる心理学をめざす、という意味においては、私はまったく同意するものである。しかしながら、なぜ、従来の諸心理学がトータルな人間像を描きだせなかったのかについては、私は氏らのように、ただたんに諸心理学の方法的欠陥を問うのみではなく、それらの広い意味での哲学的基盤および、近代における人間の在りかたそのものにまでつきささる問いを用意しなければならないと考えるものである。こうした点については、後述することにする。

次に対象についてであるが、「日常言語」と「自己の体験」が並列的に挙げられていることにたいしてまず疑問が生ずる。なぜならば、ここでの「日常言語」がもしも「自己の日常言語活動」でないならば、それは「自己観察、直観」の対象となることはできないであろうし、また「自己の日常言語活動」を指すのならば、一般に「自己の体験」のなかにはいるものであり、ことさら「日常言語」を対象の、しかも筆頭に挙げることは意味がなくなるのではないか、と思われるからである。⁽⁹⁾実はもっと重要な疑問は、対象として「心理学が有している知見」が挙げられていることである。私はこの点にいたって、いったい氏らの《円卓心理学》は psychology であるのか metapsychology であるのか判らなくなってしまうのである。たとえば「100 Hz の音の最小可聴限は約 25 db である」とか、「 $sE_R = sH_R \times D \times K$ 」であるとかの「心理学の知見」(一般に心理学の知見にもさまざまなレベルでのものがあるが、このことは今は考えないものとする)につ

いて「複数の研究者」がそれぞれ「了解法をも用いて分析」し、「全員の理解と納得にもとづく一致をみた」ら「その事実、実験的事実に比す」るものとするのだろうか。もしもこうしたことがなされたら、おそらく Hullian と Skinnerian の別々の実験的事実に比すべき事実が出現するであろうし、あるいは全ての心理学研究者が最小可聴限について「一致をみた」としても、はたしてその「一致した」という事実は「実験的事実に比す」ものであるだろうか。また、こうしたことが可能であるならば、一般にすべての「～学の知見」は《円卓～学》によって「実験的事実に比すべき」一致の事実へと走りだすことになるであろう。⁽¹⁰⁾ 私は氏らのこの主張に、分析哲学の〈science of science〉の主張と通ずる基底を見出すのであるが、すくなくとも氏らのここでの主張については、否とせざるをえない。それは、氏らが metapsychology を云うこと自体の奇妙さ⁽¹¹⁾と、たとえ metapsychology であったとしても免れない奇妙さについての否、なのである。

方法の問題については、前記の〈了解法〉をめぐる疑問のほかに、先には等閑にしておいたのであるが、氏らの云う「実験的事実と比すべきもの」としての「事実」とは何であるか、という問題がある。氏らの表現からは「一致をみる」にいたる過程を指しているようである。なぜならば、文の読まれかたからそう考えられること、および、一般に「実験的事実」というコトバが、実験の過程的事実を指すからである。このことを氏らが「心理的出来事が、厳密な条件統制下で、客観的に、したがって反復可能性をもって、観察できるならば、……実験と同等の価値をもつ」(0.8.)と氏らの云う〈了解法〉の「価値づけ」を述べていることと併せて考えてみよう。この引用では、「観察」されるものはある「心理的出来事」であるとされているが、これからすると《円卓心理学》の方法のなかで「観察」される「心理的出来事」は「全員の理解と納得にもとづく一致」であるように思える。そうであるならば、はたして《円卓心理学》は一般に、そうした「一致」という「心理的出来事」が生起する物理的・心理的環境条件を

「厳密な条件統制下」にしているだろうか。どのような場所で、どのような〈円卓〉を囲んで「一堂に会」すかは「全員の一致」といった「集団心理的出来事」には、さしたる影響はないにしても、どのように「異なる知識と体験とパーソナリティをもつ」何人の研究者によるのかは、「自己の体験、心理学が有している知見、その他〈心〉に関係するとおもわれるものすべて」のいずれかについての「全員の一致をみ」ることにたいして、きわめて重要な影響を与えるであろう。そもそも「心理学的知見」や「〈心〉に関係するとおもわれる」あることがら、たとえば、「どの物も一瞬前に人の手で触られ、場所を移されたかのようなのだった。このつかみ難い、またほとんど云いあらわしようなない感じがこの室の沈黙にもよそにはないある感じを与えていた」(J. Green 〈Minuit〉より)といった「体験」について「全員の一致」を得ることはほとんど不可能であろうし、それはたとえ「集団心理学」が完全になったとしてもそうであろう。あるいはまた、「集団心理学」が完全になったとしても、〈円卓〉を囲む研究者が、すでに「心理学を正式に修めている」といった所与の者であるかぎり、「厳密な条件統制」は不可能であろう。

さらに、「実験的事実に比すべき事実」は「心理学が有している知見」を対象とする場合には、先に述べたように、ある statement としての「知見」への metapsychology のレベルの問題となり、「一致」は、全員がその「知見」に賛成か反対か、ということになるほかないだろう。この場合は、「一致」の「反復可能性」は、方法に依存するのではなくなくなってしまい、また一般に反復は不可能であろう。逆に、「反復可能性」を主にして考えると、「厳密な条件統制」のなかに、同一の研究者たち（特定の複数個人）を指定（統制）することを考えることもできよう。つまり、S氏、K氏、O氏の《円卓心理学》では、あることがらについて常に、反復可能性をもって「一致」が観察できることが、「実験的事実に比すべきもの」とされていると考えることもできる。私は、特定個人による了解を

重視するものではあるが、氏らの文脈においてはおそらく、こうしたことは無意味であると思われる。

最後に《円卓心理学》の研究者の必要条件として氏らは、「科学としての心理学を正式に修め」ることを挙げているが、氏らの主張によれば《円卓心理学》は「科学」としての条件を充たしているのであるから、この意味が、《円卓心理学》研究者は《円卓心理学》(の方法)を修めた者でなくてはならない、というのであれば redundant な表現であろうと思われる。またそうではなく、《円卓心理学》以外の「科学としての心理学」を要求しているとしたならば、氏らが(0.1.)、(0.3.)、(0.4.)で述べている「人々をして「なるほど」と思わせる説得力」を《円卓心理学》の知見は、いかにして保証するのであろうか。(特に、対象が、科学としての「心理学の有している知見」である場合は難しいであろう。)

以上私は、氏らの主張する《円卓心理学》が、その目的・対象・方法・研究主体のそれぞれにおけるあいまいさと誤り、およびそれら相互の関係における矛盾を、個別的に指摘してきたわけであるが、全体として《円卓心理学》はいったいどのようなものであるか、を考えてみたい。私には氏らによる主張は、「〈一般心理学理論〉の復活と進歩」をはかるために必要な、近代的人間存在および近代主義的人間観の批判的把握を欠落させたまま、主観主義的観念論の〈了解法〉といわゆる中立的一元論の〈操作主義〉を、前者のあいまいさのままに強引に短絡させた方法論のみによって〈一般心理学理論〉の構築を可能としようとしたものと思えるのである。しかもこうした問題に重なって、コトバのもつ認識論的な重層性などの特殊性への顧慮なしに、コトバに対してのみ特殊的に成立するかもしれない方法論を、「自己の体験、心理学的知見、その他〈心〉に関係するとおもわれるものすべて」に適用できるのだ、と不当なる一般化をおこなうことの問題性が存在すると考えられる。

本来ならば次に私は、「〈記憶〉の問題について適用」された《円卓心理

学》の具体的な展開についての検討をすべきであろうが、私は前に述べてきたように《円卓心理学》なるものは、端的に云って、存在しないと考えるものであるので、いちおう氏らの「〈記憶〉を巡る考察」は、別箇のものとして扱い、ここではこれ以上は述べないことにする。しかも、たとえば氏は、「要するに、われわれは……くつろげる会議室、そしてなによりも心理学への情熱にもえる研究者たちが必要であることを主張したいのである。」(0.9.)とか、また論の最後に「擱筆に際し大方の御批判を切に希望する。それにより、今後の研究が進むことは、継時的な意味で《円卓心理学》なのであって、われわれの真意はそこにあるからである」(6.)と述べているが、これを読むと私は、いささか私自身の肩肘の張り具合とお皿のような眼に恥ずかしさをおぼえてしまうのである。

3.

私が人間のトータルな姿を描く方法の一面として、《了解》といったものを考えるに至ったのは、きわめて大きい背景で云えば、近代主義的な人間諸科学の客観主義へのあきたらなさのゆえである。さらに歴史的次元で云えば、フランス革命の3つのスローガンから〈友愛〉を徹底的に排除し⁽¹²⁾つづけ、ついに〈管理社会〉に至る、資本主義社会の発展と、そのなかでの人間の人間からの剝奪と、人間と人間との乖離の現実を見るがゆえである。たとえば D. Diderot がフランス革命のいわば前夜に書いた人間の〈感性〉についての考察は、近代主義的な人間科学にはまったく引継がれてはいないように思われる。もちろん私は、だからといって、あくまでも近代主義の地平を出ないものとしての、客観主義に措定されたかぎりでの主観主義を復活しようとするものではない。本来的な人間を、その実践の相において、Mit-Mensch での問題として、Gattungswesen として捉えきり、しかもそのなかに Individualität をかぎりなく包摂することが可能な方法を保つこと、が私の《人間学》の最終目標である。⁽¹⁴⁾

《了解》の諸問題についての予備的考察

以下、こうしたモチーフと目標のもとに、若干の展開と問題提起をおこなおうと思うのだが、問題の大きさのゆえにも、未整理未展開な部分の多いことを予めお詫びしておく次第である。

4.

私はすでに、〈了解〉というコトバがどのような意味をもっているかを簡単に述べたが、ここでそれを、もうすこし詳しく吟味してみる。まず佐藤氏らに倣って「広辞苑」をみると、次のように記されている。

「さとること、えとくすること。」

〈会得〉の項には、

「意味をさとること、知力によってさとること、がてんすること、了解。」とあり、〈さとる〉が重要な意味のようであるのでこれを見ると次のごとくである。

① つまびらかに知る。物事の道理を明らかに知る。

② 推しはかって知る。察知する。

③ 〔仏〕迷を解いて真の道理を知る。煩惱を脱して涅槃を得る。」

結局、Dilthey 流の“Verstehen”を考えないとすると、〈了解〉は、〈知る〉ことのひとつの在り方（おそらく瞬時的かつ全体的な知り方なようである）であるか、または仏教語としての〈さとる〉を意味すると思われる。ところで〈さとる〉は〈悟る・覚る〉であるが、後者の〈覚〉は、〈覚ゆ〉としても用いられる。佐藤氏らの「記憶を巡る考察」で、「無意図性動詞」として分類された〈おぼえる〉はおそらく〈覚える〉であろうが、〈さとる〉または〈了解する〉も、意図性とともは無意図性をもつように思われる。禅における〈さとり〉とは、存在の秘密を自己自身において、秘密としてそのままに体現することだそうだが、この、対象にたいしてふるまっ
て知るのではなく、対象をふるまうことで一挙に対象を知る在り方は、意
図無意図の区別の水準を後者のもとに超えている。禅の〈さとり〉の在り

方には興味を惹かれるものがあるが、ここでは立入らないことにする。⁽¹⁵⁾しかし、これから述べてゆく〈了解〉の在り方は、その主体のふるまい方（実践）において、禅の〈さとり〉と近いものをももつことになるろう。

語論から、さらに文論のレベルで〈了解〉を見てゆくと、たとえば「ある人 a を了解する」⁽¹⁶⁾というコトバは、a を a として identify することではなく、a の在り方の構造を知ること、a の在り方に対する「何故に」という問いへの全体化された答えが含まれた知り方を意味するように思われる。また、「a がバカであることを了解する」ことは、「a の知能はバカの分類にはいる」ことを知るのではなく、a がバカであることが、a の全体構造に整合することを知ることであろう。しかもこうした〈了解〉主体が、a の全体構造を identify しなくともその整合性が知られるような知り方であり、それは〈了解〉対象 a との〈了解〉主体による「一体化」（先の禅の悟りで云う「存在の秘密の体現」に通ずる）によって保たれているのではないだろうか。もちろんこうした叙述は、たんなる日常言語分析以上（以外）のものを含んでいるが、私はあえて〈了解〉というコトバのうちに、こうしたニュアンスを、Dilthey 的な意味で「分析的」に見出したいと思うのである。そして、佐藤氏らが「おぼえる」というコトバを、respondent・operant に対応づけてゆこうとした方向は、E. Spranger 流に云えばきわめて「自然科学的心理学」の方向であって、そうした構成主義をもっては〈了解〉といった活動を捉えきることはできないことを示した⁽¹⁷⁾かったのである。

次に、ひとたびこうしたコトバの問題としての〈了解〉の把握をはなれて、私たちの身近な体験のなかから、〈了解〉的と思われる活動の在り方を垣間見てみる。

ある人間の死に際して、その家族が悲しみをもつという状況を考えてみると、その家族構成員 a, b, c はいずれも、互の悲しみの状態についてある種の「共感」をもつであろう。こうした「共感」は、いわば「悲しみ」

《了解》の諸問題についての予備的考察

の同一性によって支えられているのであるが、そのうえでさらに、a はただ「共感」をもって b・c に対するのみではなく、いわば「悲しみ」の差異性のもとに b・c の在り方を捉えるであろう。⁽¹⁸⁾ たとえば父 d が死んだ場合、母 a、息子 b、娘 c は、そうした家族共同体内でのそれぞれの位置関係によって、異った質の「悲しみ」をもつであろう。「共感」における「悲しみ」が受動的かつ静的であるとすれば、こうした「悲しみ」は過去から未来へかけて動的でありかつ能動的であると云えよう。私はここに、共同体における他者把握の〈了解〉的活動を見出すのである。b は a に対して、a が b に対してもっていた過去の関係を過去にさかのぼりまた現在の「悲しみ」の状態にもどるなかで、また a の b・c に対する関係を過去から未来へまで動く視点でとらえるなかで、現在の a の「悲しみ」を意味づけ、把握する、つまり〈了解〉するのである。こうした、互に「共感」し、〈了解〉しあう関係のなかに、ひとつの共同体の在り方があるだろうし、時間の進行のなかである他者を全体化して捉え、なおかつそれを〈了解〉主体をも含めた共同体に全体化してゆく過程のなかに、私は、近代人が失っていった⁽¹⁹⁾あるもの、近代主義的人間科学がとうてい捉えなかったある人間的な本性を見るのである。⁽²⁰⁾ 私はこうした点で、J.-P. Sartre の〈前進的一廻行的方法〉⁽²¹⁾を高く評価するものではあるが、Sartre には「共同体へ全体化する」過程を視る基本的な視座が欠落しているので、ひとたび「実践」の領域にふみだした〈了解〉を捉えるときに、きわめて限定された「実践」(投企)⁽²²⁾でしかなくなってしまうと思われる。その意味で Sartre は、いわば疎外態にある〈了解〉しか展開していないのである。

〈了解〉のひとつの疎外態としての例を見てみよう。たとえば私たちがあ
るゲームを観戦するとき (a と b のボクシング試合を考えてみる)、私た
ちは知らず知らずのうちに、いずれかの競技者の立場からそのゲームの展
開を見ていることに気づくことがある。a のボクサーのひいきである私は、
b のボクサーのストレートやフックを、「防ぐ」とか「殴られた」とかの意

味づけのもとに見るし、a のアップercut を「やられた」ではなく「やった！」と見るのである。こうした、いわゆるひいき目は、ある他者の在り方のもとに彼の行為を見、意味づける、一種の〈了解〉活動である。他者の行為の進行のなかに私をおくことによって、即自的に他者を〈了解〉するこうした在り方は、普通「感情移入」と呼ばれ、演劇とゲームをつなぐ二次的な性質と考えられる。しかしこうした〈了解〉は、その活動が一方的である（ボクサー a は観客である私を〈了解〉しない）こと、および、〈了解〉主体の在り方が総体としては受動的に停まる（ボクシング試合に私が入ることはできない）ことにおいて、あくまでも疎外態としての〈了解〉でしかない。⁽²⁴⁾しかし一般に、狭い意味での認識方法としてとりあげられるものは、人間の全的な活動からすればいわば疎外態としてあるのであって、その意味では、疎外態としての〈了解〉を捉えることは無意味ではないであろう。

以上のように、〈了解〉的とおもわれる人間の活動の現実について、禪における〈悟り〉のごとき、いわば対自然の〈了解〉と、対人間における〈了解〉の二態を見てきたわけであるが、こうしたさまざまな在り方の〈了解〉を、科学の方法論にまでしあげるにはまだ多くのステップが必要であろう。ここでは主として、人間的事象の〈了解〉的把握をめざしているわけであるが、対自然の〈了解〉はいったい科学とどう結びつくであろうか。私は、きわめて冒険的な云いかたであるが、それは近代自然科学においては「技術」に覆われてしまっているのだと考えたい。西洋の近代主義がテクノクラシーへの道を進むときに、禪における〈悟り〉とはもっとも遠いものになってゆくのである。しかし、自然科学の問題のなかに全く〈了解〉的なものはいる余地がないわけではなく、私はそれを、自然科学と人間的現実との関わりのレベルに見出したいと思うのである。人間科学の問題として〈了解〉を扱うには、まず〈了解〉をひとつのコミュニケーション活動・過程として位置づけておかななくてはならないであろう。そうでな

いと、従来の客観的・概念的な知と〈了解〉知とが切離されてしまい、たんなる主観主義の創出か再現に陥る危険をもつことになるであろう。

5.

結論的に云えば私は、佐藤氏らの意図した《円卓心理学》や Dilthey 的な「解釈学」の方法論は、コミュニケーション（精神的交通）方法論に帰着し、〈コミュニケーション学〉はひとつの、自然・社会科学および文学・芸術の認識活動所産にたいする認識方法論としての、基礎科学となり、それがさらに〈コミュン学(論)〉の一構成をなす、という構想をもっている。人間の認識史（通常、思想史・学史・学説史などと云われるもの）を描き、人間の認識を批判し、また文学・芸術を創り観るときの方法論は、いずれもその基盤として〈コミュニケーション学〉を持たなければならないと思われる。一般に学問や思想は、ある客観的対象に向かっていると同時に、コトバに憑かれており、つまり他の人間に向かっている。この後者の側面が〈コミュニケーション方法論〉を要請するものである。〈コミュニケーション学〉は一面では〈コミュニケーション心理学〉であり、それゆえ心理学は自らにとって、学であると同時に学であるための方法論である、というきわどさを持つ。このきわどさの解明が、私が心理学の問題を論ずることの目的なのである。私には、このきわどさの解明の放棄こそが、近代の心理学を「人間不在」にせしめたものと思えるのである。

まさにここから私の本論は始まり、コミュニケーション総過程を、表示—表出の統一としての表現と、知解—了解の統一としての理解との統一過程として捉えること⁽²⁶⁾へと向かい、さらにそこから〈コミュニケーション方法論〉を描きだしてゆくのであるが、もはや紙数も尽きてしまったので、本論の展開は後日にゆずることにする。ここでの私の論議は、あまりに独断的かつ断片的であったであろうが、もしも幾ばくかの理解と関心をもたれたならば、批判を含めた御協力を願うものである。

- 註(1) あえて私がこうした批判を「哲学」誌上で行おうとしたことには、現在の諸学界・諸大学のなかに、身近な批判をやりとりする場または学風が失われていることへの challenge の企図も含まれている。以後こうした相互批判が多く現われることを期待するとともに、今回この批判論文の執筆・掲載を助めてくれた当の被批判者である佐藤氏ら、および本誌編集者に感謝するものである。
- (2) 私はこうした点について、Boss, M. (1957) *Psychoanalyse und Daseinsanalytik* (邦訳「精神分析と現存在分析論」) から教えられるものが多かった。私は、Boss の Freud に対する評価方法、つまり Freud の治療と Freud の学説を分離して、前者に主たる意味を見出してゆく方法に賛成する。その意味からは、H.K. Wells の Freud 批判は、近代主義化された Marxism の立場からの一面性の限界をもってしていると云えよう。
- (3) W. Dilthey がたとえばその手記のなかで〈了解〉の「その最も完全な働きは解釈者(了解主体)の天賦にまつものである。」としている(邦訳「想像力と解釈学」)が、Freud はまさに治療者としては「一天才」であっただろう。
- (4) 寡聞にして私は氏らが云うような意味で「〈心〉の問題を解明しよう」とした Oxford 学派の哲学者を知らないが、ここでは本筋に関係ないので問わない。
- (5) あるときには自然科学者さえ含めて研究者は、ひとたび「文献(書かれたもの)」を扱うときには多く〈了解〉をも用いていると云えよう。分析哲学はおそらく一面では、こうした〈了解〉のはいる余地をなくそうとするものであるだろう。
- (6) 氏らの云う「構成主義心理学」や「ゲシュタルト心理学」で用いられた内観や、あるいは Freud 以来の精神分析的治療における〈了解〉といえども、全体としては「複数人の一致する内観」を採用している。
- (7) たとえば氏らは、「これら(「ジャーナリズム心理学」の書物や記事)の多くは……己の心にてらして「なるほど」と思わせるもっともらしさを多少なりとも有しているので、読者をして、自己もしくは他人の〈心〉について、いくばくかの理解を深めたという満足覚えさせていることであろう。」(0.1.)と述べているが、なぜ「ジャーナリズム心理学」が「満足」を与えるのかについて、「読者」(実際には日本人とアメリカ人がこうした読者の多くを占めよう)の、日常的な他者に対する不満足さへの視点、すなわち人間科学(心理学)ではなく人間存在そのものへの視点がないことは、私にとって「不

《了解》の諸問題についての予備的考察

- 満」である。
- (8) こうしたトータルな人間をとらえきる科学は、L. Feuerbach や N.G. Chernyshevskii の伝統をついで、人間学 (anthropology) と呼ばれるべきかもしれない。そしてあらためて近世初頭の I. Kant まで溯って、二つの人間学をひとつに統一することが必要であろう。
- (9) 氏らは実は「日常言語」を対象とした《円卓心理学》的研究に最も自信をもっているから、それを筆頭に挙げたのではないだろうか（と私は了解する）。私には、氏らの 1. 以後の「記憶を巡る考察」のモチーフは、0.1., 0.3., 0.4. などの《円卓心理学》のモチーフとは全く別のものとしてあり、むしろ前者の方が先にあったのではないかと思われてならない。
- (10) こうなると一般に科学的な認識所産は、対象としての客観的存在との対応としてではなく、認識主体の間主観的な問題としてのみ扱われることになるう。
- (11) もっとも氏らが、「(全員の一致をみる) 手続を積み重ね、〈心〉に総合的考察をくわえ……〈一般心理学理論〉の復活と進歩をはか」る、と述べている部分では、「積み重ね、総合化し、一般化する」といった、考え方によっては metapsychology の問題をも含んでいると思われる。しかし氏らはこうした「総合化・一般化」についての新たな視点を何ら提出してはいない。
- (12) 三溝信 (1968)「市民社会における社会と個人」参照。
- (13) Diderot, D. (1773) 邦訳「逆説・俳優について」または「Helvétius の人間論に対する一貫した反駁」参照。
- (14) いわゆる Frankfurt 学派の仕事と、J.-P. Sartre の “Critique de la raison dialectique” から、この点について教えられるものが多い。
- (15) こうした「対象をふるまう」在り方は、現代詩の一部、たとえば長谷川竜生に見出される詩の方法そのものであるという面白い事実がある。
- (16) ただしこの文は、佐藤氏らの判断記号では？か??に相当するものであろう。
- (17) もちろん私は Spranger の立場に立つものではないが、しかし、佐藤氏らが 0.3., 0.4. で述べたようなカデミー心理学のあきたらなさ、実はそこに人間の “Leben” が見出せないことなのであり、その意味では Dilthey-Spranger の “Leben” への企てを私は評価する、と同時に私は、三枝博音「精神科学の根拠づけのディルタイ的方向に就て」(Dilthey, Ideen über eine beschreibende und zergliedernde psychologie, 1894. の邦訳「ディルタイ記述的分析的心理学」所収) の Dilthey に対するいわば内在的批判をも評価するものであることを表明しておく。

- (18) こうした意味で私は、佐藤方哉氏の努力（「“共感”と“模倣”の行動理論的分析」1967. 科学基礎論研究, No. 30）を、なぜそれが《円卓心理学》の基礎づけの一部にでも用いられなかったかと惜しむものである。氏の続く研究を期待したい。
- (19) 「失なってきた」ではなく「失なっていた」である点に注意。
- (20) 「家族」は例として引かれただけであって、別に私は「家族共同体」が近代を超える方途だと考えているわけではない。
- (21) J.-P. Sartre, (1960) Critique de la raison dialectique (précédé de Question de méthode) Tome I. (邦訳「方法の問題」).
- (22) たとえば, P. Chiodi, (1964) Sartre e il marxismo. (邦訳「サルトルとマルクス主義」) の第5章参照。
- (23) 「受動的」(passive) であることは、観客は喜こんだり、くやしがったり
の感情 (passion) はもつがそこに停まり、Marx のいう、「受苦的 leident」
—「情熱 leidenschaftlichkeit」—「情熱的存在 leidenschaftlichwesen」とい
う「能動」への転化はない。(Marx, 邦訳「経済学・哲学手稿」).
- (24) いわゆる「アリストテレス的演劇」に対する B. Brecht の批判は、こう
した〈了解〉が受動にとどまってはならず、状況をひとたび対象化する契機
によってそれを能動に転化しなくてはならない、という点にあり、これが
「Verfremden (V) 効果」なのであった。ついでながら、Verfremden (異化)
はつまり Entfremden (疎外) なのであり、Brecht は「疎外」を方法とし
て用いているのである。
- (25) 一般的なコミュニケーション論の基礎づけに関しては私は、芝田進午,
(1961)「人間性と人格の理論」, 山田宗睦編 (1963)「コミュニケーションの
社会学」, 滝沢正樹 (1986)「コミュニケーション概念の検討」(放送学研究・
17) などに述べられている, Marx の“Verkehr”概念を基礎とする立場
に立つものである。

Problems of 《Apprehension》

— A Critique of 《Round-table Psychology》 —

Kohji Yokoyama

Résumé

I have tried in this paper to investigate the 《apprehension》 method as a methodology of the human science, especially of psychology. And this investigation has been done through textual criticism of the concept of 《Ryôkai》 in the 《Round-table Psychology》 advanced by Satô, M., Kamio, A. and Ono, T..

(1) I have pointed out the ambiguities of the concept of 《Ryôkai》 in the 《Round-table Psychology》, and then criticized.

(2) Furthermore, their idea of 《Round-table Psychology》 has been criticized because of its subjectivism and operationalism.

(3) Then, 《Ryôkai》 as an ordinary Japanese word has been analyzed, and the human 《apprehension》 function as an aspect of the understanding functions has been examined.

(4) Last, I have advocated that the 《Communicationology》 as a methodology of the human science, and have suggested a scheme for the basic communication process.